

まんだら通信

第210号 (通巻245号)

平成25年12月 西暦2013年 佛曆2579年 皇紀2673年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



ふかしよくせんみん 不可触賤民のこと

約百年前の明治三七(1904)年一月、開国して五〇年という後進国が、こともあろうに北の超大国ロシアに宣戦布告しました。世界中が、とりたいところですが、そんな小さな国はどこにあるのか知らない人の方が多かった、というのが実態だろうと思います。陸上では苦戦もありましたが『日本海海戦』は、こちらがかすり傷だったのに、相手のバルチック艦隊はほぼ全滅という圧勝でした。

例えてみれば「ネズミがゾウに戦いを挑んだ」わけで、万が一にも日本が勝つと思っていなかった世界が、アッと驚いたのも当然でした。中でも普段いじめられ続けていた周りの国や、白人国の植民地として奴隷のような扱いを受けていたアジア諸国の人々に計り知れない勇気を与える

初代のインド首相ネルーさんや『東京裁判』で唯一人「被告は全員無罪」の判決をしたインド人のラダ・ビノード・パール判事は、日露戦争当時子どもでしたが「日本の勝利が自分のことのように誇らしく、毎日パレードにくっついて行進した」と話しています。それから更に四〇年、昭和一六(1941)年二月八日『真珠湾攻撃』と共に、アメリカをはじめイギリスやオランダなど、世界の殆どを相手の戦争になりましたが、残念ながら敗れます。でも、日本は敗れはしましたが、この戦争がきっかけになりアジアの植民地はすべて、独立を勝ち取ることが出来ました。中でもインドは特に日本に好意を寄せ、戦後、東京都台東区の子供たちの熱意に感動したネルー首相が、上野動物園にインディラという名前のゾウを贈った話は有名ですね。

この名前は勿論、ネルーさんのお嬢さん、後のインディラ・ガンジー首相です。この時のインディラの人気はパンダどころではなかったということです。そして今でもインド議会は、広島・長崎の原爆の日には、欠かさず黙祷を捧げるということです。つい先日ご訪問の両陛下への、最大級の歓迎ぶりでも、その日本びいきぶりがよく分かります。ただ、私にはインドのためにとても残念に思うことがあります。先月号の『余滴』で少し触れた『不可触賤民』のことです。既に二六〇〇年前、お釈迦さまは「人は生まれによって高貴であったり賤しかったりするのではなく、生まれてからの行いによるのだよ。」とおっしゃっています。それにもかかわらず、ヒンドゥ教と深く結びついたカースト制は、インドの社会にしっかりと根を下ろして、びくともしませ

ん。そして不可触賤民はこのカーストにも入れない、動物と同じ扱いの人たちです。元気の良い子供は、デリーなどの大都会に出て、信号待ちの車の前で、曲芸もどきをして見せ、気まぐれに投げられる小銭をあてにします。元気ならば、こうして何とか生きていられますが、病気になるたり年寄りになれば、上の写真のように道端で乞食をする他ありません。写真が小さくてよく分かりませんが、ずっと向こうまで何十人も座って、道行く人の『お情け』を待っています。不可触賤民出身で、ネルー内閣の閣僚も務め、インド憲法の起草に携わったアンベドカル博士は仏教への改宗を勧め、この時は五十万人が仏教徒になったということです。ですが、一億人といわれる数からすれば、まさに砂漠の一滴に過ぎません。インドに行くたびに思うことは、何千年来の苦しみから、この人たちが抜け出すためには、教育が一番必要だろうということと、同時に安心して食事が出来ることではないかということです。

ブツダガヤの日本寺などは、学校や診療所を作り、土地の人のために福祉事業をしていますし、笹井秀嶺師はナグプールというところで、新しい仏教徒のために活躍中ですが、如何せん七十八歳のご高齢でもあります。そしてこれは、インド全体から見れば『砂漠の一滴』。日本は今でも、世界一の義侠心の持ち主です。ブツダガヤの日本寺は『国際仏教興隆協会』という全国組織が運営しています。たとえばこの組織が、本腰になって日本全国の宗派に呼びかけ、貧しい人たちのための基金を集め、給費制の学校や診療所をインド全国に作って、インドの恥といわれ、お荷物になっていくこの人たちを泥沼から救い上げるお手伝いをすれば、インドと日本の絆は更に確かなものになるでしょう。

▼今月の野草はハマダイコン【アブラナ科ダイコン属】です。牧野富太郎博士は「畑の大根が野生化したものである」と図鑑に書いてあり、定説のように、私は逆ではないかと思っています。それは兎も角、今はまだ、吹きまくる北西の風に必死に耐えている風情ですが、2月からの花の時期になると海岸を埋め尽くす大群落が見事ですね。▼ともあれ、今年も残りわずか。どなたにも、平成26年が穏やかで平和な歳になりますよう、お祈り申し上げます。2013/12.08 龍渉



余滴

▼毎年同じ言い草で、いささか気が引けるのですが「光陰矢の如し」で、まごまごしているうちに今年も12月になってしまいました。おまけに、帰国後ちょっとした体調の変化と思っていた風邪気味ですが、どうもまだすっきりしません。ですので、ズルを決め込むわけではないのですが、ご法事やお葬式も若い人たちに頼んでいます。▼12月8日は、お釈迦さまがブツダガヤの菩提樹の下で悟りをお開きになった記念の日です。砂漠で生まれた一神教が、いつも争いのもとになっていますが、仏教は争いをしない宗教です。これからの世界で求められるのは、

仏教のこのような考え方で、その中でもお大師さまの密教は、懐の広さでは一番です。▼もう一つの12月8日。言うまでもなく『真珠湾攻撃』ですね。「軍部が暴走して日本を破滅に追い込んだ」という人が今でもいます。けれども、歴史を自分の目で確かめ、自分の頭で考えればこの「戦後史観」は占領軍、つまりアメリカが巧みに仕組んだ、間違っただけの見方だと分かります。本当は当時のアメリカ大統領ルーズベルトが、手を変え品を替え、日本を戦争に引きずり込んだのが本当の姿です。

にっぽん人情小噺

三遊亭鳳豊

第九十五話 指相撲

今年の文化勲章受章者に、高倉健さんが選ばれましたね。うれしいですねえ。僕たち、若い頃はやくざ映画を見終わると、肩をいかせて健さんの真似をして映画館から出てきたもんですよ。

その健さんもいつの間にか八十歳を超えましたから、当然、当時の健さんのファンもかなりの高齢でございましてね。それでも健さんファンは、ずっと健さんになりきっていますからね、病院に入院しても健さんなんです。髪もスポーツ刈りで、着流しを着て寝てましてね。

先日、ある熱狂的な健さんファンの方が病気だということで、お見舞いにかがいましたら、「鳳豊さん、ひとつお願いがあるんだ。聞いちゃあくれないか」って、いかにも健さんのようにボソボソって感じに言うんです。

こっちも喜ばせてやりたいもんですから、そのおじいさんに向かって、「兄貴、私でできることだったら、なんでも言うって下せえ」なんて言ったら、こう言ったんです。「俺に番外地(万が一のしゃれ)のことがあったら、あとは頼む。息子は俺とちがって唐獅子(からぎし)のしゃれ(意気地)がねえもんだから……」

今日は、病気で入院しているお母さんと、その娘さんの話をいたしましょうか。娘さんの名前は内田美穂さん、四十三歳。建築会社の経理課に勤めながら、自営業のご主人と高校生のお嬢さん、中学生の息子さんの四人で暮らしているキャリアウーマンです。

一見、何の心配もないように見える美穂さんですが、大変な気掛かりを抱えています、それは、美穂さんのお母さんがガンで入院していることです。胃ガンの末期で、

余命は半年だと告知されていました。

もちろん、当のお母さんには伝えていませんが、ふだん出不精のお父さんまで見舞いにくるものだから、お母さんも次第に自分の病状が分かるようになってしまいました。

そのためか、お母さんは盛んに美穂さんに会いたがります、美穂さんには弟もいるのですが、お母さんは長女の美穂さんに「今度、いつ来るんだい？」と云っては、約束の日になると、朝から痩せた体を起こして待っているというのです。

そんな待っているのだったら、と美穂さん、会社に頼んで、働く時間を午前十一時から午後三時までにしてもらいました。そして、月から金は、会社に行く前に病院に寄って、夕方に再び病院に行き、病院の面会時間が終わる夜八時まで、ベッドの脇で見守る生活を送ることにしました。週末は、もちろん午前中から夜までずっといっしょです。

それでも、お母さんの体は次第に衰弱してきます。手術もできないほど病気が進行していますから、仕方がありませんが、美穂さんにはそれがとてもつらいのです。

そんなある日、突然、お母さんがこんなことを言い出しました。

「美穂、お前は幸せかい？」

「え、どうしたの？ 急に」

美穂さんは、驚きました。お母さんの顔を見ると、なんだか頬が赤く見えまして。

「お母さん、私はとても幸せよ。でも、なんでそんなことを聞くの？」

「あのね、昨日の夜ね、私、片桐さんの夢を見たのよ」

「誰？ 片桐さんって」

聞けば、お母さんが若い頃勤めていた会社の同僚で、片桐功という人がいたそうです。

その人は、仕事もできたけど、何しろ、顔も体型も石原裕次郎にそっくりで、足も長く、とにかくカッコいい人だったそうです。会社の女子社員の憧れの的で、彼が帰りに寄る喫茶店には、先回りした女子社員が集まって待っていたというのですから、よほどいい男だったんでしょうね。

「へえ、その片桐さんが、どうしたの？」

「ある日、私に話したいことがあるって言うので、指定された喫茶店に行ったら、突然、片桐さん、お母さんにプロポーズしたの」

「ウソ」

美穂さんは、椅子から思わず転げ落ちそうになったそうです。

「それで、どうなったの？ お母さん」

「聞きたい？ 片桐さんはね、その時、アメリカの支社に転勤が決まっていたね、私にいっしょに来てくたさいって言ったの。でも、私は長女でしょ。アメリカに行くわけにはいかないから、お断りしたの。そして、『僕がアメリカから帰ってくるまで待って』って言われて。お別れの前日、ふたりに指相撲をしたことをいまでも覚えてる。彼、わざと負けてくれて。私もずっと彼の親指を押さえつけてね。でも、彼が戻ってくる前に、お父さんと見合い結婚をして、そして一年後、あなたが生まれたのよ」

お母さんの衝撃の告白に驚いた美穂さんは思わず聞いたそうです。

「それで、片桐さんはどうしたの？」

「風の噂で、向こうで結婚したとか聞いたわ」

初めて聞いた母の独身時代の恋の話。

「そんなことがあったんだ。その片桐さんが夢の中に出てきたんでしょ。何か言ってた？ 夢の中で」

「幸せですか」って。「はい。幸せです」っていったらね、『それはよかった、本当によかった』と云って、消えていったわ」

お母さんは満面の笑みで、うれしそうに美穂さんに話しました。美穂さんの胸が熱くなりました。余命いくばくもない母の脳裏に突如現れた若き日の恋人に、「はい、幸せです」と答えた母がむしうにいとしく思えました。そして、もし、自分が母の立場で同じような夢を見たら、「幸せです」とはっきり言えるだろうか、ふと考えさせられたそうです。

そして、その翌日からお母さんの容態はどんどん悪くなりました。美穂さんは会社を休んで病院に付き添っていました。それから一週間後、静かに息を引き取りました。

(あの日は、いったい、何か起こったのだろう)

臨終の時、美穂さんは涙をこぼしながら、まだ微かにぬくもりの残るお母さんの親指をとって指相撲をしたそうです。「はい、幸せです」と言った母の声を思い出しながら。

除夜の鐘つきと初ゴマのご案内

元朝護摩は、これから年末にかけて随時受け付けております。

お礼の材料から奉製まですべて、お申し込みの皆さんのお顔を思い浮かべながら、心を込めてお作りし、ご祈祷をしております。

お初穂料は今年も2,000円です。

行く年と新しい午歳の幸せを願っての、除夜の鐘つきは大晦日の11時45分頃からです。

今月の『にっぽん人情小噺』も、いつもと同じようにMOKU出版と三遊亭鳳豊師匠の太っ腹のご好意で転載させていただきました。いつもながら有難いことです。紙上を借りてお礼を申し上げます。